特54
46

倭紫田舍源氏

貳拾四ん

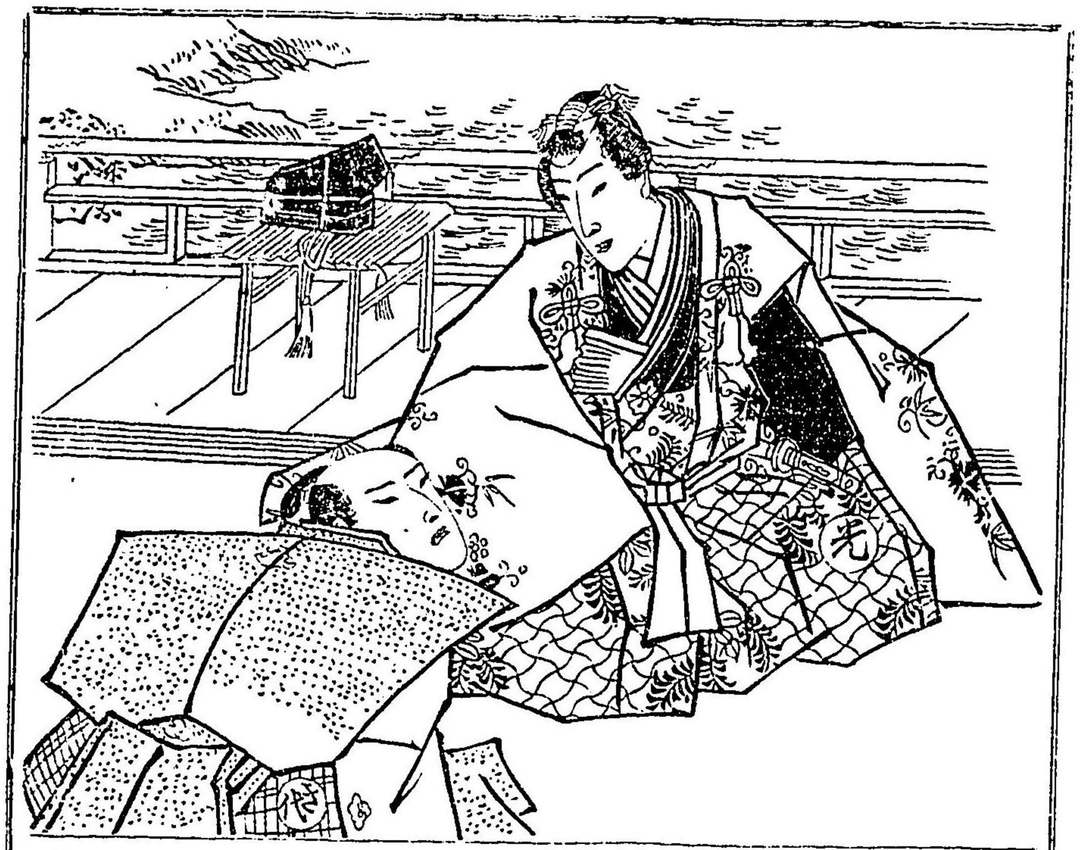
只事あらずと近くよりのぞのと歷除さしのゞけゞあちむざんやな馬之丞五體いつゝく處もあく首さへものきおとし持去していなれゞ頓五郎いあきれて暫言もあゝりしゞ馬刀助を木陰へ招ぎ「汝も我も宗全様のおはせをうけて光氏の様子を探らん其爲わ石堂の館に奉公何者の所爲かいたらねど馬之丞ゞ此最後い手もぬらさずに敵を一人打取たるにてもつけの幸ひ然し家來いうろたへて皆逃去し様子あれゞうゝ〳〵てゝに居る時い其まきゞへわてわれ〳〵ゞ身わもせんぎの懸るべしむやく山名のお館へ立歸て此事を申シわげんといひけれゞ馬刀助いうちうあづき「ろれよからん〳〵此稻船へ光氏ゞふをにい何りかきたるトかたれときのまだくらきに挑灯わすゝし見て「家の宝玉兎の鏡今宵ふしぎに手わいつたり此鏡い義勝公よりうなたへゝたをの品あれゞ此秋八月りやうやわい必返し參らせんフゥたまの兎の宴をとり月見にゝへす其鏡を路にてつちへためこの兎差上るものあらゞ宗全さまわいご滿足ろれもよしあれもよしアヽふびんあい馬之丞年若なゞら武道に達し力もありとの世のうゝさろれわにあわずゝらだいあゝ〳〵石堂ところ瓦堂さて〳〵もろひたわさまト二人り一度わ高笑をりからきのゝる忍のごうちわいわつと女のあき聲「石堂さまいご最後とやゝりゃ眞かトいひあゞら轉出しいいろよき娘てあたの二人りい吃驚し顔見られしと挑灯の火を吹消てあとくらまゞ足わ任せて逃行けり

以下い花の宴のおもかげにあめり此つぎの年わて光氏二十才の春あり

如月の二十日あまり義正公い室町の南表の廣座敷わ櫻のえんをせさせたまふ其名ものはる花の御所今年い常より暖にて今を盛の其景色ゑに寫とも寫えじさあゞら雪ゝとあやまつたのりつき山いたゝ白妙にて或い泉水わ陰をうつして魚も櫻のみずゑをくゝり或いついぢわさきこぼれ能晴て空の景色さえづる鳥の聲ゞ必持よ[illegible]

義尚光氏初とし文學わ達したるんをたまたりて各詩をあんずるわ[illegible]春[illegible]とりて候とのたまふ聲さへ人わ[illegible]兄義尚も其生きよりかにして武道をくゝしされどもさえわはこらざるをおくゆゝしげに見せんとや萬の事を壓鎖てむづゝひわも心ゞ用もの〳〵しげわもてあしたり其よの人いむるむると是あき庭わ立出うち連もむづかしくておくしゞちに見もるもおぼかりやうやく詩も作り果ちつぶのあろびにうつりしとき赤松左衛門まさのりを光氏い近くよび「去年正月二日の朝おん身の見れわえさせたるこのまの摸様の麗さわむまのをりわ用ひんとゑまいヤ招しゞ兄上にも去頃同あやにて作りまゐらせしよしを聞申シ合せて小袖まで今日いつゝゐに着せしかゞゝくむやしに連てもひとゑはむえあるこゝらして滿足ありトありけれゞこつとむかりにゝうべをさげ一あやしくやつれ見どころあき摸様わい候へどもめさせたまへる人ゞらわよりてい艶にも見もるあり難有おはせをうけ恐入て候トひたゐわあせしてくるしげあり此廣座敷の右の方ゝうかぐちのゝら戸をさし庭いつゐぢにへだてたゞゞ花いひと目わ見えあゞら男と面を合さねゞ此ひと問をうたゝ〳〵のもうらんのせきとさだめつ富徽の前い藤の方の御子をもうけてときめけるを安のらずい思ひあゞらゝるをりわいつとても親げわもてあして「今日い天氣も晴朗あれゞ貝おぼひにゆしゆかうのきのむすばるゝ遊びよりとまねきおいたる女あり召使といふにいあらねどわらいとい親きものあれゞ舞いかうわゝ節今様あどとい事のむり出雲の國より五條わのぼりおくわといふゞ弟子とあり顔舞伎ととあゝるわざおぎにてあゝ〳〵きようあるものゐりとのたまへゞ藤の方「ろれい何よりめづらしい杉生司もおえんへでゝ拜見しやト云うちわろれ〳〵と富徽の前さしづにつれてゝの

娘てんくまんを頭にいたゞきおん前へ立出て手をつくして舞たりける。やう〳〵入日ゐる程にてゐたの間ゐても太郎たゞゐ遊佐の國助初めとし日頃の能を好めるもの様々ふきよやうをろへいと面白くい見ゆるものゝら紅葉のおんゞの其ときのてれもちにいくらべゞたくろのをりおぼし出られて義尚庭の櫻を打手をとつて光氏をせちゐせめさせたまひゝれゞ逃難立上りいで〳〵花をくまふよと櫻狩をたゞひとさしけしきなゐり舞たまへるゐにるべきものゐく見えゐけりゐたの座敷ゐ數多の女光氏の聲をもれ聞ゐのお窓の目ゐくしのすきからゐれ〳〵お袞ゞと立騒ぐ其内に顔舞伎も已に果けきゞ富徽の前い彼娘を舞のいまやうの儘ゐていざゐひ窓よりうゞひたまへども夕暮といふ嫌ゐゞ遠目よくも見えねど何やらんうちさふやいて彼娘に教へたまへゞ藤の方又ひゞぎこの御事をゐしさまにやのたまふらんゐどかくまでい悪きたまふといいひゐゞら血を分し我子といふにもゐらざるに又わかぎこをいとはしむおのれゞ心もゐやしやとこづゐら思ひかくすどい富徽の前い氣もつゐず元の席へたちもどれゞ藤の方い彼娘に盃をさしたまふにもとより酒い好とおぼしく人も云ゐぬに數盃を重後にいいたく酔ゐわや舌ももつれ行儀もくづゞ足い云どろに立上りやう〳〵次へすべり出てかまもぬかずてんくわんのゞゞをし儘にてふしけきゞ富徽の前いため息つきいとうきけしきに見えけるにゞ藤の方い氣の毒さゐらけし座敷をくろめんと又盃を取上て浮世語ゐうた、まぎらし暫時をゞうつしける。夜いたらふけてゐん花の宴の事果ける富徽の前い義正の殿袞ゐとて席を立藤の方義尚もろと〳〵歸らせたまひぬゞゞ今まで騒しかりけるも俄ゐのどのゐゐりぬるゐ月いとゐりうさしいでゐおかしきけしきを光氏い程能酒の酔ごゐちゐ見過難覺えゐれゞ只一人り庭にたちいで藤の方のすこたまふわたりを去のびてうゞひゐりくゐ人〳〵もうちやすてこもの音ゞえてゐゐりしゞゞ寶の鏡水原の事ゞてろこらをたづね辺り人ゐる事を初て云りうた驚しけしきゐて「ろこふゐるのい何ゞゞト問ゞ光氏笑をふくこを「うとこたまへるものゐもゐらじトすこし前にゐじりいで(とへかしゐたゞすのつゞの草のこら)トいひさまに戸いをしたてつ女い胸も轟てゐるゐく〳〵ゐをこゐにト聲を立るをお一鎖め「わき」い人ゐ聞されて常ゐてゐらへくるものゐりさきゞ人をよびたりともろをを厭て歸いせじさまでゐわびしとおもこきて忍びて語らん事のゐりトのたまふ聲も並々の人ゐいゐらぬ姿形女いつれ〳〵うちまもり心に思ふ事もやゐらんたゞわからたをやきてつよき心も云らぬさまゐてこ〳〵しくいもてゐさす光氏何とうおもひけん女をこたとつきとゞしぢろりと見やる目の内血去り「我ゞ誰との思ふらん此世ゐ去し馬之亦汝に恨をいこんとて恐多も光氏ぎこの此御姿をゐりの世ゐいづれかの殘止らん老木の花い吹殘若木のつぼこいまゞ落ゐ老ゞ不定い世の常ゐゞら未甘蔵を多くも越す刃ゐ掛つてこかゐ



き最後たゝす河原の露霜と消しゑ問といひ掛し我發句にも心つゝず浮世ゐくるふいたづらもの詞さん事いくちおしきふてきまで現出たるゑト面色変じて立上れば女いゑつとてわげたちたゝ浅ましくわきれたるさまゐてことをもゐかりけりてゐたいはつとといきをつき「やよ桂木ふうふといふにいあらねども祇園繪の其ときより忍々にいひ語らひあゝぬ別をゐーたるい酒に亂てりんき深く人も去つたるお家の近臣びくの助ゑ丸に似合ぬ物見遊山に倶人もわづのにやつして出歩きゑすゑな身もちのゆゑゑゐのし其心たに改なば面向よりむゝへんといひしをよもや忘れいせまじ富徽の前いをづゐらのめいゆゑおん身にふびんを加へ義尚公のうちきをわとだにゐおはせいありゐゑゝ流石に忍れへのぎりをおもひ今迄得心せざりしゑ去年の夏ろれゑしゑたゝすで切害されしときえんつきずして思くずもおん身ゝしてへ行かゝりひたんの涙ゐくれたをど去ものいひゝふうとしとゝや其ゐげきい忘果此頃水原や白糸ゐ進られて世にもゐぬ人にこさをゝたてんより足利どのゝうちぎをとゝしづゝれんてゝ增ならめと遂ゐさむゑい心とゐゝ最前ゐゐたをすき見して遠目といひ殊に又つゐのご服を召たるもゑ義尚君と思遊へくるゝ戸をあけおきて光氏君を引入しゐ若ゝれゑしゑ生殘て此世にあらべ其時いおのを何と云譯をゝるトじりゝゝとつめよせらを桂木いものなもいとずおんとゝゝせに手をうちのくれべ扇々以掛のけ「此ゑで自害するときい光氏君のわざゐりと御難儀の掛い必定まゐとに心をあらためゐべたゝ此儘に立別やゝたのものにあやしやせよおとゝとふぎをせし女をよもや兄のうちぎをゐとのさねていい人もすゝめず富徽の前も此事い思ひ止たまふべしよしや浮名のたゝゑたて光氏ぎをとゝろひぶしを眞ゐ去たるにあらざれべを れへの操い立ゐらずやゐをより後いわゑたをの打々毎ゐ若君へ通ひておん身を去たゝせまゐらせ義尚ぎをとの中をべたゝんあれ〳〵四方ふをだれとりめいどのむゝへ去げけれべさらべトいこすてふすのとをれべ光氏い起上り夢のさめたる有様ゐてゐたりを見れば彼女い思ひ亂しけしきにて涙にくをてゝゑにあり「ゑひごゝちやれいゐらざりけんおもゝずてゝにまどゝをて何事をもゑらざりしおん身いいゝゐるものゐのゐるゐのりたまへトいひけをべ桂木いゝゐうちゝを（ゑづのしやゆをゝり月の水のゐげ）貞を破て二丁の弓をひゐんとしたる過をいふとい光氏きもつゝずゝや去ら〳〵と明行ば人〳〵も騒昨日の遊びの面白さに寢とすれゐどくちゝ〳〵ゐいひざゝめきて行違けしきも去るくて何事をゝとんも心ゐわたゝしく後ゐ其名を去るべき印ゐ扇ゝりをとりゝへてたちいでたまへべつぼね〳〵の戸いゝや不殘ゐけわたし光氏君ゑ又例のお忍びゐりきとつき去ろひ見とゑめゐゐら〻づのしと空寢を去たるもゐりしゐるべしもとのとゐろゐ桂木いたつもたゝれずうつゐりとおんゐと見おくるうしろより白糸水原をいざゐひて富徽の前い立出たまひ「義尚一人

り庭にのてり月を詠めてゐるよしをこれゐる水原ゞ忘らせし故ろれといなしゐ桂木をトいひけてこゐたを見ゝへりゐゐゐこづゐしい事いゐい外月にゐれゞうちひろめて義尚と婚禮さするわらいにもうべとのいゐゞら其事の氣にゝゝりけさいこやう引て來て何のの事い水原ゐ聞けといひつゝ見れゞ桂木ゞ心のうちの恥しさゐ赤らむ顔をうち覆扇い富士ゐ三保の浦目をとゞめてこつと驚ヤ、これい昨日御所さまゞゐれで舞と光氏へたまこりし舞扇トのたまふろをへ水原いそりより「ぞれ〳〵お見ヤ遊しませヲ、私も慥ゐ覺拔い夜目ゐてめしものゝ對なをろれと見逃て此おゐら戸をわざと開揺引入たのい光氏様トゐされてこたと取落す扇をとりあげ富徽の前ゆつ立上つてこゞををゐし「いふやうもゐいいたづらもの御愛子ゐるをゝさにきて兄をも母をも蔑今ゐおもひ忘らせてトむねんのこぶしゐきりつめゐもこず扇の要いだら〳〵「ア、モしろれいト桂木ゞいふもいこれぬこゞ身の恥只ゐき臥てぬたりけゝ。光氏い館へ歸りふしたれどねいられず彼くゝ戸い何として昨夜いさゝで置たるゐらんうれにつけても藤の方の住居い作も奥深通口[illegible]心を用て下々まで日頃法の行屆故にゐろゐるらめとゐさまゐりしゐおもひくらべとりのへしのの扇を見きべてむらさきの色麗しくうらの白きになを榮ゐりろの色の濃方ゐうへゐろそめる月を書て水ゐ寫し心をへゐりふれたるゑやうゐゞらゐつのゑうもてゐしたり弓張月といひしさま心ゐ掛れゞ筆をとり(世に忘らぬ心ろすき水の月)とのきつけておくとゐろへ(たろゐを)御前ゐまゝりいで「わたくし父左衛門ゞさのり今朝こやく御所へいでさをゐ申シゐゞるやうやつゞきい義教公のおんときより御三代御家につゝへたれど此度得どゐ詩歌いさらゐり能こやしものゝねもよくとゝのはりてきくものさへさゐゞらいのちをのぶるゞかりおもしろゝりし事いおぼえずきのふのでえんゐとりわけて光氏ぎをの櫻狩われをわすれてたちゐゞりをきゐもほと〳〵舞いでべきゐゝちゐんしこべるときこえあぐれゞ義正公おきげんゐとにうるこしく大内の大えんにいすべてでえんといふ事ありかしこけれどもろれを學今日も花見て遊ぞんとおゆせをうけて御迎へゐ只今參候ト聞いて光氏うちうゐづき「やゞてわれも出仕せんまづ事前ゐ問事ありトひざもと近く招き寄ゝの扇を前ゐ置汝ゐれを見知たりや昨夜月の明ゐ浮れゐもこずも富徽の前の住せたまふほろどのゐ行て見いるをゞ白綾にひのはゝゐをに似命いずはずはにてゝやう〳〵の女にゐへり館に使る風俗ゐらねゞ富徽の前の緣者ゐるべし言を掛んと思内眠るともゐくろをゞしいゝしゐ倒て前後も不知目覺て見をゞ傍に尙去やらず女いををりさすをゞさまでろれゞしを厭とい見えぬものゝら逢ゐ其名を明ていはず何とてゐとを通はすべきさまをゞ敎ずゐりぬらんと心懸に思ゐりトとはせたまふも馬之丞ゞ世にゐきたまのゐん身ゐろひろれゐ心のとまをるゐるべし(たろゐを)い扇をとりわけ今のたまひしゐとをつくゝ思廻すゐ琵琶之助の娘の桂木きのふ顔舞伎の舞をこのなで裝飾のまゝ醉倒しうはさを聞ゞろれゐらんとおはゝたい推したれど去年雨夜ゐ馬之丞ゞ物語し事もありゝついゐいゝ〳〵義尚公のうちぎをにとのゐん催し其上ゐ琵琶之助と緣組たをゞてじうとのろをころ娘にさぶらふゐれとわからさまゐもいひ難く「扇い見ゑらず候へども惟吉もろともおん館の歸をうゝゞひ見定て扇の主の名いひろゝに申シわげ候べしトろれより直に光氏の御供にゑたゞひつ室町御所へまゐりけれゞ光氏もこえんの事にまぎきて其日い暮しけり。夢の間に此如月も過行ぬゝくて弥生の二十日あまり光氏い晝頃より室町の館ゐ趣父義正のきげんをうゝゞひつぎへたちいで茶をうちのゑ休息ゐしてゐるところ、近習の侍まゝりいで「青葉琵琶之助ゞ家才大夫只今こゝへ罷越若君へ此書翰をたてまつらんと最前ゐ嵯峨へ罷出たるところゐれゐわたらせたゆふと聞御跡ゑたひて候ト御玄關

にひろへてをれりいろゝ詞らひ申さんといひつゝふゝみ
さしいだせゞ光氏い其書翰を開き再父の前に出「此頃一
日琵琶之助對面ゐしたる其時ふろれゞしへ申スやう我下
屋敷の園のうちゐ花もゐべての花ゐらず色美しく英い長
く世ふたぐひなき藤のわり盛の頃ゐ藤の花のえんをもよ
はし候はん必わたらせたまふべしトおんいでゐくいく
ちをしと呉々もいひたるゞ花も程よくゐりたるゐひだ此
ものどもを供ゐつれ今よりゐしゐへきたれよとむゐへの
人をゐゐせたりトくだんの手紙を見せけれゞ義正いうた
わらひ「おのれゞ園のはゐぶさをいと長々とほめたるい
ゑたりゞはゐてをゐしきゐや類ゐきといふ藤い赤や咲黄
にや咲はやうゐしゐへ行て見よ琵琶之助ゞ妻帥い富徽ゞ
實の妹ゐて汝につけおく(たゐゐを)の女房いまた琵琶之
助ゞ妹にてゐるゐれゞ縁といひ殊ゐい當臣よもゐりやく
ゐいゐすまじとおゐせゐ光氏すべりいでよゐはひをひき
つくろひ道行内ゐ日い若果ゐたるゝほどゐわたりたまふ

琵琶之助いいで迎御乘物いゐなたへと庭口よりゐきいれ
さゞ難有御來駕の一禮述て土ゐ手をつき乘物の戸を引ゐ
くゞゞからゐやの羽織小袖わざとあさ[illegible]いはゐゞよ
しやづくりの細身の大小ゐいろに櫻の蒔繪ざや大鼎姿の
ゐまめきたるに花の香もけおされてきようもさめべき有
様ゐり光氏ゐたりをつくゞゝ見るゐげゐゐれゞ告しゐ遊
はず藤い今を盛ゐて燈籠の火を數多掲げさゐゞら壹の如
くゐゞゞのゐるくまなく見ゐたさるゝゐゑゞきたてたる
つくりさまの今めゐ志ら青葉の御と思はれずなゐとやら
人覺ゐりとゐをつくゞゝとうた守ゞ三筋町の二タ見屋の
ひろ庭ゐつくりむゐの藤の棚を撫渡ー景色を變て見せた
るゐり琵琶之助ゐたわらひ「むさくろしき狹宿へいりで
のお入を願ふべき花もゐべての花ゐらず色美しきときゐ
えしいゐゝを指ての事ゐてゐり外い散てもゐを盛の櫻も
雨水候とて(うた貝)阿古木よび出しろれゞしゐろむゐ附
添ゐゞ御氣組りにゐらんゐひだ早ゝ二階へいざゐひま

ゐらせ云附置たる御肴ゐて御酒一ゐんと進められ光氏も
ゐつてとうたゐを「むねんや汝ゞ謀に陷て不覺をとれり
百萬騎の大敵に圍れしよりいと苦く兜をぬいで降參せり
殿してはや來たをトいひすて二人りにいざゐはきやゞて
座敷へうちとをきゞ志をりどのゐげよりして太郎(たの
ゐを)ずつといで「やうすゐれゞ此揚屋へ今宵來ま」と貴殿
の文通其使とうちつれ最前ゐを」へきのゝりて子細いゐを
ゐて聞いたるゞ阿古木の元へ若君の打々通はせたまふの
い何ゐいゐ志らねゞ低深き御所存のゐる事にて遊女ふぜい
の色に溺るゞ本生ゐゐらずとい貴殿も兼て知るゝならん
さすれゞ君のお死びゐりきい志らず顔ゐもてゐすべきを
何故ゐゐり此所へゞざゝ揚ひたまひしゞト問かけられて
琵琶之助默然たる顔をあげ「血の餘とて老ての後設たる
子い可愛と諺にいいふなきど我子不愍とおもふのい老も
若きも隔いゐし桂木いろれゞしゞ十八才の時の娘和殿も
さだめ」柏之助ゞ秘蔵ゐわらうトいふを打消目ゐ角立て

をを語寄り「イヤ其事を聞いせぬ光氏君に面目を失とせまゐらせし今宵の仕方が合点ゆかぬサア其譯をト焦立を壓鎭て小壁にあり「ハテ是からいはねば譯があきぬ一人り娘とわまやかし異見もせぬゆゑ桂木が日頃からはすはゐ身持常々心に懸しが去月御所さまの花の宴より歸りて後夜にまぎれて家をぬけいで世界に其名の聽く大とく一休禪師の元へ行尼わるしてと願ひしかど禪師さらわ許したまはずたゞその遊女地獄と言い廓にありて座禪くさんぼふされば佛の道に入い姿形によるべからずと送り返したゞひしがろれよりひたすら無情を感じ鈴を敲さず魚肉をくはずゐづのゐ間に顏もやせろくてい病氣わるりもやせんとはすはの身持を案じたる昔戀しく夫ふのゐぱき此頃聞ば其夜さり光氏君とはろどのにて忍びあひしと云が
い さ若やはゐのゐき夢を見て及むぬ事と身をゐげきろれ故の發心りと思ふよりして今宵の保養のためと桂木をむりわすゝめてつれきたり遊女や舞子をよび集め日頃すきゐ

楊弓の道具を内よりとりよせて東の方のわの二階で遊むせて置たほどわ打を見合せ光氏君を只何とゐく桂木がろむへ拐まゐらせて娘がろぶりをうかゞ[illegible]わ我へまゐせてたべとれ〳〵づくでいふ時い光氏君い貴殿の妹むゐゐり桂木い姪に等きつゝきがらすの中立をといふでいゐい若世のういさが眞ゐら異見の仕樣もあらうのと親の愚痴ゐら起つた事必笑てくれられなト只手を合て拜まぬむゐり太ゞたゐなをも琵琶之助が心中を察しやりて顏いろやはらげ「ろきゐろいいとやすし宜き樣わ計らはん心をやそんじまちたまへト座敷へてろい通りけゞ。西の方の高樓に光氏い席を設け阿古木を初め數多の遊女藝子ゐんどのゐながれてかうらんをせゐのわ玄つゝ琴小弓とりどりわものゝ音どもを調合せいと面白遊びしが夜もすゐしふけ行程に光氏いたう醉ゐやめる有樣わ[illegible]てゐしければ枕のいまきろをゝ〳〵わ心を添て退つ阿古木の外わ人ゐけをべわたりをうへり見ゐゐをひろめ「去年心を附らきし

玉兎の鏡い義勝公密わゐくし置きしにて再ひ家わもどりたり又勅筆のたんざくいおん身がはだをにつけおけば我手わゐるも同全わて只此上い小烏丸彼劍だわとりのへせば三ッの寶い全くろろへり心懸いおん身の上人い知じといひゐがら足利の血筋のもの廓わ置がゐげのはしく身受ゐさんといひつれど幼時より我儘わ身を持ゐして今更わ武家の交六ケ敷と今日迄もうけひのず夜毎に變る枕のゐず末いふうふとかたらひし男のあらばゐりだちせん包まず語り聞せよトいはゞて阿古木いため息つき磯名〳〵と禿をよび「苦き海わたとへたる廓にうう〳〵世を送るはだしといふい此磯名今までうくせし身の上の昔をいふい恥しけれどうねても知しめす如く父い母ゆゑ落の俗世の交りのうとけゞべふどの煙も立兼てゞらわ十四の春よりして石巻の前齋といふ人へ妾奉公奥州の鄉士なりしが右の手をくぢきて刀も持がたく志官の望ゞを思ひ絶え山の姿水の流い都わてしたる景色なしと北山へんに假住居わ

らい〻其年ゞごもりて十五でうゞしい此磯名ゥの前齋の貢わて父母をも安くすごせしが不幸わして彼人も世を早く過たまひ此子をつれて家わ歸行程もゐく父も病死しかたゞの金も使ひ失ひ昔わ弥增貧苦のうへ又苦を重て母うづ浪風の心持と打臥たまひ次第わ重るさまゐがら今い藥を毒らせん術に盡て此廓へ身を志づめたる黃金わて心の儘わ養生し一端わ腹ありしかど母も今でい世わゐき人此子の便い妾ゞかりされば今ものたまふ如く身受ゐして得させんと仰い度々ありしゝど此磯名をも諸共わときてえがたくて花も散此身も恥ず愛務君いやう〳〵今年でお二十ゞらい〻ゞるかに年も更まだ其上わ此樣ゐ娘を持しと玄りたまいゝ弥厭ひたまゞんかと我わだ心のむづうしやト磯名をひざわ抱き上げ顏をも上げ得ず泣居たり閑度毎わ光氏い深く驚くけしきわ以爲思懸るき事を聞り其善齋と云者い腹てろ變れ我兄にて義政公未だ御世を治めたまむぬ遙前勅なき玄わ湯殿にて獻れたまひて設し御子右の

腕の利おざる故武文の交り思ひ絶へ早世さをしと云觸し北山へ閑居ありしが程なく眞ゐ世を去たもふと我も陸に傳聞り其磯名おろ光上の遺子に紛れるおしおちへ〳〵と身近く寄せつれ〳〵と打守り今迄心隠さりしが阿古木の顔ゐ生寫し見口と云節目と云打捨置べき者ゐいあらず此兒い今日より我ゐ得させよ悪き様にい計らむし午去郷にありて人も面を見知つらん先一端い影を隠し成長おして呼戻し近臣の其内にも家柄人柄正しき者を撰んで妻に送るべし其況をせて置所いハテ何國にト思案を廻しヲヽろを〳〵伊勢の國渡會郡の陳屋ゐい我腹臣の者をおけり是を指て下らすべし慥御身も幼名いいせと言しと物部其子も伊勢ゐ假住しさりゆくすゑを見た扇ゐふぐに加護のおのらんやをやゐを拜すゐ便宜の地心もとおく思ひおべろゐたもともゐゆくがよい去りしかしゐへ下るのいまだ急ぐべき事ゐもあらず只此廊を片時も早く立去ゐ去くいゐしゐ幸ひおるゐ中野の宮の傍に先年伊孫へ下りし嘉代之助が下家敷のありと聞仕あらしていわるべけをと物閑しくて暫しがほど隠れ住ゐいろゐよゐらめいゐに〳〵ト虚空眞取雑て云とい阿古木い去らず兄と忝臥ゐた女と是より會せの絶もやせん我子の出世い嬉しけれど今更に引別れ伊勢路へ下る悲しさに物をも云ずさしうつぶく光氏けしきを見て取て「思ひがけ無き事ゐる故直ゐ返答もるしかねつらん磯名にも能云聞せふをゐて跡より云おゐせト云流して扉を退き二階を下りて様がとづたひ東の方の戸口によりうた詠むれば藤棚い此方の庭ゐもかけ渡し風ゐ靡さて花房の妻戸に當るを見んとてゥ二階の障子を開渡し人〳〵の出居たり顔い見えねど振袖の摸様い目立舘風揚屋にいゐわとしらず彼藤の方の住給ふ園の事ゐと思ひいで行とゐろへ高直い急がとしく次より立出光氏の袖を引「扇ゐ書書し月の行衛を見定めて候ゐりゐの二階にト指させば「何月の出たるとや心も空ゐゐるいとて見あぐれどもうち垂し簾の霞ゐ隔りてさやゐゐろをとわかばゐ光氏心早れけん其儘二階へ驅上り「我も此家の客ゐるが廻い何れも大上戸いたく酒を進られて其座敷ゐいたまられず憚ゥりゐがら此臣へ暫し置てたまれトいゥうゐのけし小袖の裾をひきのつぎ給ひければ桂木の腰本とも打驚きしや迴頭り「女子計りの其中へ無遠慮な人でいあるト咎むるけしきを透し見るゐおと〳〵去ういあらねどもゐゐの廊の風俗ゐらずゥらたきものゥをりミ揚弓の矢のうち散しいいまめかしき遊びを好む女ゐゐろゐらんずらめと興優去う思ひゐされ弓張月い何れゐらんとゐゐたゐゐたと見渡せども彼臈夜ゐ只一度言を通しゐのミゐれば慥ゐ頭と定め難く彌々酔たるさまゐもてゐし。ふミがやりたや室町筋へとりや違へてよの人ゐやるゐ月のゥの様の手ゐ渡セト踊り唄をうたひければ「わや去うも春秋をちりちがへたる去がり山かなト打笑ふい其心を更ゐ去らぬ腰元なるべしゐをつら〳〵と見渡すに始よりして物をも言ず床の柱ゐ寄掛りて水晶の數珠をつまぐり何やらんとき〳〵ゐうち歎く氣配するが心え難く思れければいゥうの小袖をひきのけ彼取替ー扇を差出要を抓て其女の腰の傍ゐ投やれば静ゐ女い扇を取揚。世ゐ去らぬてゐちゐろすれ水の月ト吟し終りて傍ゐる揚弓の弓を取揚彼扇をうちつがへ「さんそる人いゐを知ずト云さまゐゐたへ射返したり其聲い偽ひもゐさ臘月夜にありけをばをゥしきものゐら後ゐい阿古木がゐとより付來り親ひよるゐ驚ゐれ語もゐくて分れけり花の宴の巻終り。足利殿の末下ゐ一色郡領持門と云者あり男女二人りの子をもてり兄い左京廣門と義正公の在近ゐりしが色黒く髭むく〳〵とおひたりとて廣門と云者無く髭門と字名せり其妹立田と云い後髭がちの兄にい引替見目麗しく心賢く詩歌かん弦の道ゐさへ迂ゐらざるよし聞えけれど是も或うんゐくを立田が假の親として添ゐくも義尚公の内室ゐ定りつ其年の冬とやらん義政公い東山の銀閣へうつらせ給ひ義尚公を武將と仰ぎ弥世界無爲ゐ歌へ心雷徽の前への迂早

き御心も和くべしと密めき云もありしあるべしされども御世を譏られたる其譏を申さんとて國司郡司皆々京都へ參詣せり彼伊豫へ下りたる仁木喜代之助も是ゐ附急き上京したりしかど先室町の御所へ參り直ゐ嵯峨の館へ趣き此由を云入れど光氏も今御所よりさげり裝束もぬがざりしがろを待兼し此方へと人ゐき所へ打招き絶て久しき物語思ひ出る事のを多くて左ぺらく時を寫しまげ扨光氏の云けるハさいつ年東雲げ薔寺ゐて自害の時を以て、の譴々ハ解ても難き富士の雪水ど手に入らぬ小鳥丸さりゐがら其有所ハ慥ゐろをと乍知劔の詮義と云ゐして汝を伊豫へ下しまハ宗入初め西國武士宗全に加とりゐべろれを防がん爲ゐりしがろをより火急の大事ある去頃三原と云老女敗多得させし敵の密書夫を倩々打見るゐ先年亡し伊勢の國主北畠範智げ一族水ど彼處ゐゐり赤松祐則久兩人幡磨國に忍びしげ是も密ゐ伊勢地へ趣きより〳〵味方を語らふ文休捨置れじと我近臣の影を隱して直ゐ下し渡

會郡ゐ陣屋を營を守らせてハ置つれど彼者武術ハ達しながら

（以下次號）

社告

第拾問攻得共

右二まわ美西改正三十明同

東京圖書館

和書門	小説類	函	別四架	一〇七號	二六冊

一 合本 一相替御求を廉升ノ様へハ七錢ゐて東京 うさぎや誠 横濱 守屋正造 一十部同六十八錢ゐ受候

一 慥候分を操揚候へた前後等有之候ハ比候

銀車日用ノ品 喜代吉 横濱辨天通四丁目七十番地

發兌元 東京南鍋町壹丁目 ちさぎや誠 横濱辨天通四丁目 守屋正造